

女子学生の社会的スキルと自尊感情および セルフモニタリングとの関連

吉川 洋子・飯塚 雄一・長崎 雅子

Social Skills among the Female Students and its Relationship to Self-Esteem and Self-Monitoring

Yoko YOSHIKAWA, Yuichi IZUKA and Masako NAGASAKI

概 要

女子学生の社会的スキルについて、ソーシャルスキル尺度、ノンバーバルスキル尺度を用いて看護学科1年次、2年次生、教育学部1年次生、保育学科1年次生の4グループを比較した。各グループ間に有意差は認めなかった。全体について、社会的スキルと自尊感情とセルフモニタリングの関連をみた。その結果、自尊感情およびセルフモニタリング得点が高い群は低い群よりソーシャルスキル得点は有意に高かった。しかしノンバーバルスキルに関しては、有意な差はなかった。対人関係技能・能力を向上させる教育を考えていく上で、社会的スキルを高めていくだけでなく、自尊感情やセルフモニタリングも高める必要があることが示唆された。

キーワード：社会的スキル、自尊感情、セルフモニタリング、女子学生

1. はじめに

社会や家族構造の変化により、現代の若者は相手の反応を適切に捉えることが不得手であり、自分の感情や意志をスムーズに表出できず、対人関係をつくっていくことが苦手とされている。また、自分自身や他者を傷つけることを恐れ、相手との関わりを表面的なレベルに留める傾向が指摘されている¹⁾。

看護の場面において患者-看護婦(学生)関係の成立は看護の質に大きな影響を与える。看護における対人関係技能に関する教育は、基礎看護学や精神看護学などで取り上げられてはいるが体系化されているとはいえない。学生は主に臨地実習の機会を通して体験的に学んでいって

いる。現代の若者の状況を考えれば、対人関係を基礎におく職業において、この対人関係能力を向上させる教育の必要性は高い。

和田(1992)は、他者との関係を成立させ、発展させていくために効果的にしかも適切に他者と相互作用する能力を対人的有能性と定義し、それは様々なスキルが統合されたものであり、共感性、主張力、適応性などが特定のスキルとして考えられるとしている²⁾。また、相川(1996)はこの能力を社会的スキルとし、それは具体的な対人場面において、対人的な目標を効果的かつ適切に達成できるような一連の行動と、そのような行動を可能にする認知能力のことであるととしている³⁾。我々は対人関係を円滑にする技能・能力を社会的スキルととらえる。

社会的スキルを向上させるための教育内容や方法を明らかにする第一歩として、青年期にある学生の社会的スキルの傾向を知ることが目的に、今回、和田(1992)の作成したソーシャルスキル尺度、ノンバーバルスキル尺度を使用して調査した。社会的スキルの自己報告尺度としては、他に菊池の社会的スキル尺度青年版「kiss-18」(1988)がある⁴⁾が、相川らが提唱している社会的スキルの生起過程モデル³⁾を参考に、より対人プロセスを重視した因子で構成されている和田の尺度を使用した。さらに社会的スキルに影響を与えると思われる自己概念や感情の制御について、尺度を活用して青年期にある短大生と大学生に社会的スキルとの関連を調べた。

2. 研究方法

1) 調査対象

研究の趣旨を説明し、同意の得られた看護系短期大学(3年制)1年次生73人、2年次生69人、4年制大学教育学部1年次生107人、保育系短期大学1年次生99人、計348人を対象に質問紙法による調査を行った。調査は講義が終了してからの時間を使った。348人の回答のうち記入漏れのなかったのは337人分(96%)であった。なお、男子学生は全体で21人と少なく、性差の影響は今回の分析からは除外し、316人の女子学生の回答のみを分析対象とした。

2) 調査時期

1999年6月～9月

3) 調査項目

社会的スキルを測るものとして使用した尺度は、ソーシャルスキル尺度改訂版25項目(和田、

1992)²⁾、ノンバーバルスキル尺度改訂版15項目(和田、1992)²⁾である。ソーシャルスキル尺度は言語的な側面を測る尺度であり、ノンバーバルスキル尺度は非言語的な側面を測る尺度である。その概要を表1に示した。社会的スキルに関連する因子として、自己概念や感情の統制に関連するものとしてセルフエスティーム尺度(遠藤らによる Janis & Field の S E 尺度の日本語版23項目、1974)⁵⁾、セルフモニタリング尺度(岩淵らによる Snyder の S M 尺度の日本語版25項目、1982)⁶⁾を用いた。

4) 処理方法

それぞれの尺度の得点で逆転項目については、逆転化して加算した。総得点の平均による比較を行った。統計的有意差の検定には一元配置分散分析を行い、有意差が認められたものにはボンフェローニの多重比較を用いた。

3. 結果

1) 各グループの比較

看護系短大1年次生、2年次生、4年制大学教育学部1年次生、保育系短大1年次生、の4グループに分け、それぞれの尺度の総得点の平均と標準偏差を示す(表2)。学生全体のソーシャルスキル得点平均は78.05(SD=7.19)であった。ノンバーバルスキル得点平均は44.10(SD=6.16)であった。ソーシャルスキル得点、ノンバーバルスキル得点が高いたのが看護短大1年であったが、分散分析の結果、ソーシャルスキル得点、ノンバーバルスキル得点ともに4グループ間に有意差はなかった。それぞれのスキルの下位尺度について、つまりソーシャルスキルでは関係開始、関係維持、衝突回避、拒否の得点

表1 社会的スキルの測定に使用した尺度の概要

尺度名	下位尺度	測定内容	評価方法
ソーシャル スキル	関係開始	うまく関係を開始する	1～5段階評定 得点範囲 25～125
	関係維持	対人関係をうまく維持する	
	衝突回避	衝突を回避する	
	拒否	拒否をすることがある	
ノンバーバル スキル	ノンバーバル感受性	人の表情や態度などからその人の気持ちや行動の意味を感じとる	1～5の5段階評定 得点範囲 15～75
	ノンバーバル統制	表情や態度に本当の気持ちが統制されずに現れる	
	ノンバーバル表出性	自分の感情を表情やしぐさに素直に表す	

の平均、ノンバーバルスキルではノンバーバル感受性、ノンバーバル表出性、ノンバーバル統制の得点の平均を4グループ間で比較した結果、ソーシャルスキルの関係開始において看護短大1年と保育学科1年のみに有意差が認められた、 $F(3,312)=2.98, p<.05$ 。他の下位尺度には有意差はなかった。

2) 自尊感情とソーシャルスキル、ノンバーバルスキル得点

学生全体の自尊感情得点は平均61.94(得点範囲30~108)、標準偏差は14.86でほぼ正規分布をなしていた。これをもとに平均値+1標準偏差以上の者を高自尊感情群(76.8以上。以下H-SE群と略記)、平均値-1標準偏差以下の者を低自尊感情群(47.08以下。以下L-SE群と略記)とした。中間を中自尊感情群(M-SE群と略記)とした。分散分析の結果、自尊感情の3群の間には有意差が認められた、 $F(2,313)=516, p<.001$ 。なお、H-SE群は全体の上位18%、L-SE群は全体の16.5%にあたる。

表2 各グループの社会的スキルの平均値(標準偏差)

	ソーシャルスキル	ノンバーバルスキル
看護学科1年 (n=69)	79.39 (7.22)	44.57 (6.03)
看護学科2年 (n=64)	78.44 (7.54)	44.08 (6.60)
教育学部1年 (n=100)	78.25 (6.90)	43.93 (6.78)
保育学科1年 (n=83)	76.40 (7.07)	43.94 (5.15)
全体	78.05 (7.19)	44.10 (6.16)

自尊感情の差違とソーシャルスキル、ノンバーバルスキルとの関連をみたのが表3である。H-SE群がソーシャルスキル値83.04、ノンバーバルスキル値45.15と最も高くなっていた。分散分析により3群のソーシャルスキル値、ノンバーバルスキル値の比較の結果、ソーシャルスキル値では $F(2,313)=21.88, p<.001$ で有意差を認めた。H-SE群、M-SE群、L-SE群のいずれの間にも有意差を認めた。ノンバーバルスキル値では有意差は認められなかった。

さらに、自尊感情の差違とソーシャルスキル、ノンバーバルスキルのそれぞれの下位尺度との関連を検討した(表4)。分散分析により3群の比較の結果、ソーシャルスキルでは全ての下位尺度で有意差が認められた。多重比較の結果、特に関係開始、拒否の項目で3群いずれの間にも $p<.001$ で有意差を認めた。関係維持の項目はH-SE群とL-SE群、H-SE群とM-SE群で有意差があった。衝突回避はH-SE群とM-SE群で有意差があった。

ノンバーバルスキルの下位尺度については、

表3 自尊感情の差違と社会的スキルの平均値(標準偏差)

	L-SE群	M-SE群	H-SE群
ソーシャルスキル***	74.58 (7.44)**	77.75 (6.50)***	83.04 (7.00)
ノンバーバルスキル	43.72 (6.22)	43.94 (6.00)	45.15 (6.73)

*** $p<.001$, ** $p<.01$

表4 自尊感情の差違と社会的スキルの下位尺度との関連

	L-SE群	M-SE群	H-SE群	F値
・ソーシャルスキル				
関係開始	7.82 (3.05) ***	10.31 (3.17) ***	12.62 (3.14) ***	31.684***
関係維持	19.84 (4.04)	20.82 (3.22) **	22.50 (2.98) ***	8.838***
衝突回避	10.16 (2.08)	10.00 (1.62) **	10.92 (1.63)	5.967**
拒否	4.58 (1.56) ***	5.87 (1.98) ***	7.19 (1.95) ***	25.638***
・ノンバーバルスキル				
ノンバーバル感受性	9.04 (2.75) *	10.10 (2.67)	10.19 (3.05) **	3.638*
ノンバーバル表出性	9.37 (2.94)	10.02 (2.27) *	11.08 (2.68)	6.658**
ノンバーバル統制	9.21 (3.01)	8.71 (2.33)	8.67 (2.69)	.964

*** $p<.001$, ** $p<.01$

ノンバーバル表出性($p<.05$)とノンバーバル感受性($p<.01$)で有意差を認めた。ノンバーバル表出性でH-SE群とL-SE群の間およびH-SE群, M-SE群に有意差が認められた。

3) セルフモニタリングとソーシャルスキル, ノンバーバルスキル得点

学生全体のセルフモニタリング得点は平均77.65(SD=11.06)でほぼ正規分布をなしていた。これをもとに平均値+1SD以上の者を高セルフモニタリング群(88.71以上。以下H-SM群と略記), 平均値-1SD以下の者を低セルフモニタリング群(66.59以下。以下L-SM群と略記)とした。3群間には有意差が認められた $F(2,313)=449, p<.001$ 。なおH-SM群は全体の上位17.7%, L-SM群は全体の15.8%にあたる。

セルフモニタリングの差違とソーシャルスキル, ノンバーバルスキルとの関連をみたのが表5である。H-SM群がソーシャルスキル値82.45, ノンバーバルスキル値45.52と最も高い。分散分析により3群のソーシャルスキル値, ノンバー

バルスキル値の比較の結果, ソーシャルスキルで有意差があった($p<.001$)。多重比較により, H-SM群とM-SM群, H-SM群とL-SE群の間に有意差を認めた($p<.001$)。ノンバーバルスキル値では有意差を認めなかった。

さらに, セルフモニタリングの差違とソーシャルスキル, ノンバーバルスキルのそれぞれの下位尺度との関連を検討した(表6)。ソーシャルスキルの下位尺度では, 分散分析の結果, 関係開始, 関係維持で有意差があった($p<.001$)。関係開始, 関係維持の項目でH-SM群が高得点であり, L-SM群およびM-SM群の間に $p<.001$ で有意差を認めた。

ノンバーバルスキルの下位尺度は, ノンバーバル統制($p<.001$), ノンバーバル感受性($p<.05$)で有意差があった。ノンバーバル統制においてはL-SM群が最も高値であり, H-SM群と $p<.001$ で有意差を認めた。

4. 考 察

1) 4グループ間の比較

看護短期大学1年次生, 2年次生, 4年制大学教育学部1年次生, 保育系短期大学1年次生の4グループ間でソーシャルスキル, ノンバーバルスキルに有意な差はなかった。我々は, 看護を学ぶ学生には対人関係能力に非看護系の学生とは違いがあると考えていた。野崎ら⁷⁾の報告では, 看護学生は社会的スキルが比較的高い集団であり, 他学部に比べ, 対人関係に自信を

表5 セルフモニタリングの差違と社会的スキルの平均値(標準偏差)

	L-SM群	M-SM群	H-SM群
ソーシャルスキル***	75.78 (7.57)	77.42 (6.62)***	82.45 (7.26)
ノンバーバルスキル	43.96 (5.76)	43.76 (6.13)	45.52 (6.51)

*** $p<.001$

表6 セルフモニタリングの差違と社会的スキルの下位尺度との関連

	L-SM群	M-SM群	H-SM群	F値
・ソーシャルスキル			***	
関係開始	8.24 (3.25) **	10.09 (3.07) ***	12.59 (3.61) ***	25.048***
関係維持	20.02 (3.74)	20.62 (3.27) ***	22.86 (3.07) ***	12.285***
衝突回避	10.10 (1.88)	10.08 (1.60) **	10.64 (2.05)	2.391
拒否	6.02 (2.29)	5.82 (1.99)	5.84 (2.07)	.187
・ノンバーバルスキル			**	
ノンバーバル感受性	9.20 (2.55)	9.83 (2.52) *	10.89 (3.56) **	5.387*
ノンバーバル表出性	10.22 (2.68)	9.94 (2.47)	10.46 (2.53)	1.066
ノンバーバル統制	9.88 (2.88) *	8.84 (2.29) **	7.64 (2.60) ***	11.176***

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

持っている学生が入学してくる傾向があるとしている。今回の調査で差がなかった理由として以下の3つが考えられる。まず、今回調査した学生は、看護専攻でない対象も教育学部、保育専攻と直接人と接する職業に関連する学部や学科を選択した学生であり、対人関係について比較的苦手意識の少ない集団だと考えられる。野崎らの報告でも総合政策学部や情報学部よりも社会福祉学部の学生の社会的スキルが看護学部の学生に近かった。さらに看護短期大学の2年次生が基礎看護実習を終了しているはいえ、1年次、2年次あわせても3週間という短期間であり大きな変化を期待するのは困難である。看護を志向して入学してきたといっても、講義中心の1、2年次においては、対人関係についての能力を高めていくことは困難と言える。もう一点として、今回使用した尺度は一般的状況を想定した質問内容となっており、青年期にある学生の社会関係における社会的スキルをより反映したことも考えられる。

2) 自尊感情との関連

自尊感情が高い群は低い群に比べ、ソーシャルスキル得点が高く有意差があった。ジャニスら^{8),9)}は、自尊感情を社会的適応の感情ととらえている。自己の価値を知覚しているほど、不適切感は低いことを意味する。自尊感情は人間の社会的行動、例えば他者の表出に対する反応や社会的参加を規定する重要な要因と考えられる。社会的適応についての感情を高くもつ人は関係開始・維持が円滑であることを示している。言い換えれば、関係開始、関係維持のための他者との関わりをとる行動にしやすい。また、衝突回避より拒否の因子において高い群の方が有意に得点が高かったことから、自尊感情が高い群は他者の意見に反対であれば自分の意見をきちんと伝える主張性も高いことがうかがえる。

ノンバーバルスキルと自尊感情の差違の間に有意差がなかったこと理由としては、日本人の特性や地域の特性が考えられる。和田¹⁰⁾は日本人はノンバーバル行動があまり大げさに表に出てこないためにノンバーバルスキルについては違いがでにくいと考えられるとしている。し

かし、下位尺度との関連をみていくと、ノンバーバル表出性において、自尊感情高群が低群に比べて高い値を示した。自分が社会から認められるまたは受容されているといった感情が高い者が自分の感情や気持ちを表出しやすい傾向があると考えられる。

これらのことから、社会的スキルを高めていくためには、自分が社会から是認または受容されているといった自尊感情を高めていくような働きかけが重要であると考えられる。カウンセリングのスキルでも、評価的態度や解釈の態度でなく、理解の態度の必要が言われている。応答的で好意的な環境が社会的スキルを積極的に使用させる状況をつくり、社会的スキルの向上につながると考える。

3) セルフモニタリングとの関連

セルフモニタリングの得点が高い群は、低い群に比べソーシャルスキル得点が高く有意に高かった。スナイダー¹¹⁾は、状況や他者の行動にもとづいて自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切なのかどうか観察し、自己の行動を統制することをセルフモニタリングと定義している。セルフモニタリングの高い者は、外的要因に基づいて行動する人であり、自己の社会的行動の状況的適切さについて関心が高いために、社会的状況における自己呈示の仕方や他者の示す手がかりに敏感で、状況に応じて自己の行動をモニターする傾向が強い。一方、低い者は、内的要因にもとづいて行動しやすく、自己の社会的行動の状況的適切さよりも内的に一貫した行動を行うことに関心があり、自己の状況をモニターしながら行動する傾向が弱いといわれている。セルフモニタリングの高い者が、ソーシャルスキルの得点が高く有意に高かった。下位尺度との関連をみると、関係開始や関係維持、またノンバーバル感受性についても高い群が高得点を示し、有意差があったことは、他者の示すノンバーバルメッセージに敏感で、状況および対人関係の中で状況に応じて関係を開始したり、維持ができるといえる。反対に、ノンバーバル統制については、低い群が高い群より有意に高かった。これは、自己の社会的行動の状況的適切さより

も内的に一貫した行動を行うことに関心があるため、自己の本当の気持ちを統制することなく表す傾向にあることを裏付けている。セルフモニタリングが高い者が対人関係がうまくいくとは一概に言えないが、他者を援助する専門的職業としては、自己の感情を制御し、その場に応じた適切な関わりができることも必要な要素であると考えられる。

5. ま と め

ソーシャルスキル尺度、ノンバーバルスキル尺度を活用して、女子の看護短期大学1・2生次生と4年制大学生1年次生、保育学科生の対人関係能力を調査した。それぞれの尺度において4グループを比較したが有意差はみられなかった。

ソーシャルスキル・ノンバーバルスキルと自尊感情との関連を調べた。自尊感情の高い群は低い群に比べて、ソーシャルスキル得点が有意に高かった。下位尺度について比較すると、高い群は関係開始、関係維持、拒否、ノンバーバル表出性において低い群より得点が高く、 $p < .001$ で有意差があった。

また、セルフモニタリングとの関連では、セルフモニタリングの高い群はソーシャルスキル得点が有意に高かった。下位尺度での比較ではセルフモニタリングの高い群が低い群に比べて、関係開始および関係維持($p < .001$)、ノンバーバル感受性($p < .05$)で有意に高く、反してノンバーバル統制では有意に低かった($p < .001$)。

社会的スキルを高めていくためには、自尊感情やセルフモニタリングにも目を向け、意図的

に活用していくことが効果を高めるうえで有効であることが示唆された。

6. 引用文献

- 1) 犬田 充他：標準を追う孤独なナルシストたち，現代のエスプリ265，14-76，1989
- 2) 和田 実：ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂，東京学芸大学紀要，1 部門43，123-136，1992
- 3) 相川 充，津村俊充編：社会的スキルと対人関係，誠信書房，4-21，1996
- 4) 3) 前掲書，42-43
- 5) 遠藤辰夫，安藤延男，冷川昭子，井上祥治：Self-Esteem の研究，九州大学教育学部心理学 部門紀要，18(2)，53-65，1974
- 6) 岩淵千明，田中国夫，中里浩明：セルフモニタリング尺度に関する研究，心理学研究，53(1)，54-57，1982
- 7) 野崎智恵子，千田睦美，布佐真理子，三浦まゆみ：看護大学生の社会的スキル，日本看護学会看護教育論文集，30，74-76，1999
- 8) 遠藤辰夫，井上祥治，蘭 千壽：セルフエスティームの心理学，ナカニシヤ出版，27-31，1998
- 9) 遠藤辰雄編：アイデンティティの心理学，ナカニシヤ出版，64-66，1998
- 10) 和田 実：対人的有能性に関する研究—ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成—，実験社会心理学研究，31(1)，54，1991
- 11) 大淵憲一，堀毛一也編：パーソナリティと対人行動，誠信書房，66-68，1998

Social Skills among the Female Students and its Relationship to Self-Esteem and Self-Monitoring

Yoko YOSHIKAWA, Yuichi IIZUKA and Masako NAGASAKI

The social skills of first and second year nursing students, first year education department students and first year early childhood education department students were investigated using the social skills scale and the nonverbal skill scale. No significant differences were found among the 4 classes of female students.

The students' social skills in relationship to self-esteem and self-monitoring were also investigated. It was found that in all groups, students who scored higher in self-esteem and self-monitoring also scored higher in social skills. No significant differences were found in the relationship to nonverbal skills. These results suggest that not only social skills, but also self-esteem and self-monitoring are important factors in nurturing the students' skills and abilities in human relationships. These findings suggest that to improve students' interpersonal skills we have to consider both external factors (social skill) and internal factors (self-monitoring, self-esteem, etc).

Key words : social skill, self-esteem, self-monitoring, female students